

# 科学的社会主义の世界観を学ぶ

## はじめに

- ・激動の時代だからこそ自然と社会の全体像をつかむ努力を
- ・「マルクスは古い」は古くなった
- ・なぜ、くり返しきり返しマルクスへの注目が広がるのか

## 一、科学的社会主义とは

### (1) そもそも社会主义とは

### (2) マルクス以前の社会主义——空想的社会主义

サン・シモン (1760～1825)

フーリエ (1772～1837)

ロバート・オーエン (1771～1858)

### (3) マルクスたちの科学的社会主义

## 二、唯物論と弁証法

### (1) マルクスの歩みから

- ・マルクスの出発点——ヘーゲル哲学
- ・ヘーゲルは弁証法の完成者。しかし観念論
- ・観念論から唯物論へ——「現実的な諸前提」から出発する

### (2) 唯物論と観念論

- ・物質と精神と、どちらがより本源的か
- ・唯物論と“心”的問題

### (3) 弁証法の成果を受け継ぐ

- ・弁証法的なものの見方の3つの特徴
- ・「肯定的理解のうちに否定的理解を含む」
- ・形而上学的なものの見方は、どうして生まれたのか？

## 三、史的唯物論

### (1) 社会を唯物論的にとらえる

- ・“そもそも論”的な考え方
- ・土台と上部構造

- ・階級とは

## (2) 人類のこれまでのおもな発展段階

### 四、資本主義経済のしくみ

#### (1) 市場経済とは

- ・あらゆるものが商品として売り買いされる社会
- ・商品は、使用価値のほかに価値を持っている
- ・価値の大きさ
- ・労働の2面性——具体的有用的労働と抽象的人間的労働

#### (2) 労働についてのマルクスのとらえ方

- ・人間と自然の物質代謝
- ・労働のなかにおいて人間はみずから的能力を発展させる
- ・生産過程の3つの要素——労働力、労働対象、労働手段  
生産手段=労働対象+労働手段

#### (3) 搾取の仕組み

- ・生産手段の価値は、そのまま商品に移転する
- ・労働が新しい価値をつけ加える
- ・不变資本と可変資本
- ・賃金とは——労働力の再生産に必要な生活必需品の価値
- ・必要労働時間と剩余労働時間
- ・支払い労働と不払い労働
- ・剩余価値率(=搾取率)と利潤率
- ・資本主義では1日の労働全体に対価が支払われているように見える

#### (4) 利潤を大きくするための方法

- ・労働時間を延長する——絶対的剩余価値の生産
- ・必要労働時間を短縮する——相対的剩余価値の生産(そのためには社会全体の生産力が上がらなければならない)
- ・労働密度を高める
- ・不变資本の節約

#### (5) 資本主義の推進力と体制的矛盾

- ・資本の「目的」「推進動機」
- ・そのために、生産力を無制限的に拡大しようとする——「生産のための生産」

- ・しかし社会は、生産力の無制限的拡大を受け入れるようにはできていない
    - もうけを最大にするために、労働者の賃金はできるだけ低く抑えようとする。その結果、社会の大多数者の消費は狭い限界の中に押し込められる。生産の無制限的拡大は、その狭い消費の制限と衝突せざるをえない。
    - 商品が最終的に売れるかどうかにかまわず、競って生産を拡大する。そのことから、周期的に恐慌・不況に見舞われる。
  - ・現在ではマルクスの時代には見られなかった新しい問題が生じている。
    - 地球環境問題、南北問題など
- ※エンゲルスの「資本主義の根本矛盾」論について

## 五、マルクスの未来社会論

- (1) 資本主義の矛盾をどのようにのりこえるのか
  - ・カギは「生産手段の社会化」
  - ・生活手段の分野では私有財産が保障される
- (2) 「生産手段の社会化」によって社会はどのように変わるか
  - ・「結合した生産者たち」が生産の主役に
  - ・「社会的理性」を働かせる
  - ・人間の全面的発達が社会の大目標に
- (3) 「自由の国」と「必然性の国」
  - ・自由の発展は、マルクスが一貫して追求した問題
  - ・どんな社会でも人類が生きてゆくために働くを得ない部分——「必然性の領域」
  - ・未来社会になると、この「必然性の国」はどうなるか?
    - 階級社会では、「必然性の国」の部分を被支配階級に押しつけて、支配階級が「自由の国」を謳歌していた。それをすべての人が等しく分かち合うようになるのだから、一人ひとりについて見れば「必然性の国」の部分は小さくなる。
    - 他方で、欲求の広がりとともに社会全体では「必然性の国」は拡大する。
    - 「必然性の国」の中においては、労働のあり方が人間的、合理的なものに変えられていく。
    - しかし、それでもなおこの領域は「必然性の国」。本当の人間的自由は、「必然性の国」の終わったところから始まる。

※エンゲルスの「自由の国への飛躍」論と混同しないこと。

以上